

風が吹いて
ベランダに置き忘れられている書物のページがあおられて乾いた音をたてた

そのむこうで

春うららが花びらを散らしている

太陽の光さえも油断なく

《風も書物も春うららも太陽》も

物質の恍惚性を満喫している

(春の夢)

耳朶に快楽を流しこむ風はすでになく
凍りつく夜を回復させる太陽もすでになく

眼球を威嚇する純白な雲もすでになく

感傷的な月もすでになく

情緒の極みの星雲もすでになく

ただ

風が吹いている

太陽が輝いている

雲が南へ移動する

夜になれば月も星も出るだろう

春うららも散るだろう

風も太陽も雲も月も星も春うららも
まよふところなく

風であり太陽であり雲であり月であり星であり春うららである

この現存性の前

世界は「あるだけである」という

物質性の前で

ぼくは途方にくれる

世界は言葉によつてはじめて分節され認知されるのか
世界は人間なしにはじまって人間なしに終わるのか

そのこともそうだが

ぼくが他者の欲望でしかないとしたら

ぼくはだれの欲望だろう

ときは春うらら

満開の下

咆吼する三叉路

彷徨する花びら

スフィンクスもどきの花びら

花びらは花びらを超えることはないが

ぼくはぼくのかわりに花びらを読みとく

読みとかれた花びらと読みとられない花びらの形状に差異はないとしたら

あるいは

読みとかれたスフィンクスの背後に

読みとかれることを拒みつづける花びらがあるとしたら

そう

読みとかれたくない花びらもある

読みとかれる矛盾にその物質性が崩壊する花びらもある

読みとかれた困惑におびえながらも舞いおちるだけの花びらもある

それらの花びらを身にまとして

春うらら

波打ち際を歩くぼくに春うらら

波打ち際を歩くぼくに春うらら

とりあえず

ぼくもぼくも春うらら

波打ち際のこちら側とむこう側で

春うらら

通りをふたつもまちがえて

ようやくその店の前にたどりついたときは

自転車のかさなったガラス窓のむこうに

おとこのにくたいが

暗黒を反転した光にまぶされていた

光のなかで

ゆるやかな観客を前におとこのにくたいがやわらかな動きを見せていた

世界はどうとでも変わるんだと

指先ひとつ

毛穴ひとつからでも

あるいは

吐息ひとつからでも

だから

世界の硬直化はおそれることでもない

世界はわたしのにくたいのように柔軟さを忘れていない

窓のむこう

踊り子直一ちよくいちは

にくたいの声を聞きたいと

あるいは

この世のしくみをしりたいと

あるいは

みずからの場所はどこなのだ

誇張もされず修辞もされず感傷にも陥らず

にくたいを駆使して

まるで

その店のせまい空間が直一のゆいいつの場所で

そこでは生きられないとしたらどう生きていったらいいんだろう
と

腕は腕なりの距離を耐え
足は足なりのいらだちを耐え

ペニス¹は地上の浮遊感に巻きこまれることなく

直一は唸音性を流動性に転化して

みずからのにくたいが測れる距離を

さがしている

そこから先はだれの手にも負えないのだから

存在の没落など意識することのない時代に

存在を意識することの困難さが

ときおりほくを威嚇することがある

だが

傷は浅い

死ぬほどではない

窓のむこうで

光になずむ直一の肉体は

たおやかな指針のようだ

観客のまなざしなど

わたしのにくたいを窮屈にするだけだ

わたしをほうっておいてくれ

わたしはただこの場所でワタシのにくたいと在るだけだ

遅れてきたぼくは

直一につらなる扉をさがしだせずに

春ふかい夜の路上で

自転車に寄りかかって

わたしをきわだたせている直一のにくたいをガラス越しに見ている

糸をひくような山の頂から墜落する夢ばかり見るのは
高所恐怖症だからとか

自分の小便のなかでおぼれている夢ばかり見るのは
泳げないという正当な理由があるが

行けども行けども自分とも他人ともつかない体内を抜け出せない夢ばかり見る
のは

口ほどにもない生き方をしているからで

夢だとばかりおもっている今日をなんとなく現実のように錯覚するのは
コドクだからさ

(なんて臆面もなく書いているのは 笑止)

眠ることのない夜のなかでぼくの脊髓のあたりを

夕陽が沈みはじめる

子守歌のふたつみつつ

夕陽が沈んだあとに

世間に隠しているくるぶしの腫れぐあいのよつついつつ

あるいは

未明近く夕陽が昇ってくる気配のなかで

むつつななつばかりの快樂悅樂愉樂夢樂

やつつここのつの自分を抱いて

昇りきった夕陽に肉体をさしだす

とおの次はいちなのかどうなのか(なしなのかどうなのか じゅういちな

のかどうなのか

だれの欲望が夢のなかのだれを窮地に陥れているのか

どうなのか

地中深く蔓で繋がっているふたつの生き物

地熱に身を焦がし岩盤に成長をこぼまれ

地球の回転速度で蔓が生長するそんなふたつの生き物

ひとつの生き物が他を包含し

ひとつの生き物が他に包含される

いずれにしても

包含するものされるもの

どちらもあんたはあんたで

あたしはあたし

と

主張すらできない関係のふたつの生き物

夢のなかの自分を食い破って出てくる現実の自分が

現実の自分を食い破って出てくる夢のなかの自分にうりふたつな

のには

つい苦笑してしまうが

それよりも

食い破ることさえできなくて

しどろもどろでどちらかの人生に

閉じこめられたまま生きつづけていかなくはならない

と覚悟する自虐的な存在

で満腹になっているのは

どちらだろう

だけど 穴がない